

科研費による学術研究の成果について

◎学術研究とは

- 言わば、人間、社会、自然の中に潜む真理を探究することを目標にした知的な営み。自らの発想で自由にかつ責任を持って、原理や知見を徹底的に追究するという固有の特色。
- 学術研究を通して人類の福祉（安定した生活や社会環境を基盤とした尊厳ある幸福や繁栄）を支える知を蓄積し、文化的基盤を形成。それを基底に更に科学を進歩させ技術を開発するために不可欠。
- そのため、社会は学術研究に対して、
 - ・ 新しい知識の発見や深化などを通じ、社会が抱える問題解決に向けた指針を提示、
 - ・ 現在の社会構成者の幅広い福祉の増進に直接的・間接的に寄与、
 - ・ 将来世代が自らの幅広い福祉を追求する能力を引き出すことに寄与、といった役割を期待。
- 特に、このような中で、学術は宇宙間に存在するありとあらゆるものに対する理性的な認識により、人々に、社会や経済を含めた様々な物事に対する公正かつ正当な判断力をもたらす重要な役割。

◎学術研究を支援する科研費は、

- 「顔の見える」知的成熟国家としての国際的信頼の獲得、
- 学術研究を支える人材などの育成、
- ノーベル賞のような国際的な学術賞や我が国に持続的に発展をもたらす新しい社会的な価値の創出、
- 学術研究の過程で地域経済や生活の質の向上に寄与するブレークスルーの創発、

などに大きな役割と成果。具体的には、

- ・ ノーベル賞などの画期的な成果をもたらした科研費の研究成果
 - ・ 社会にブレークスルーをもたらした科研費の研究成果
 - ・ 日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果
- が挙げられる。

○ ノーベル賞などの画期的な成果をもたらした科研費の研究成果の例

◆ 白川英樹・筑波大学名誉教授

「ポリアセチレンフィルムの半導体としての研究」
(1969～ 試験研究、基盤研究 他)

⇒ ポリアセチレンの薄膜化で導電性ポリマーを開発
ノーベル化学賞(2000年)



34年間に科学研究費補助金を24件いただいています。これは毎年というわけではありませんでしたが、1件で3年連続受領ということもありましたので、ほぼ通年にわたって何がしかの科研費を得ていたということになります。
(平成13年11月「我が国の学術研究の明日を語る会」にて(出典:「学術月報」2002年2月号))

◆ 野依良治・理化学研究所理事長

「遷移金属錯体を用いる新規合成反応」
(1972～ 一般研究、特別推進研究 他)

⇒ 有機金属化合物の触媒で鏡像体の作り分けに成功
ノーベル化学賞(2001年)、ウルフ賞(2001年)



科研費は日本の中で最も有効に機能している研究費だと思っております。私自身も長い研究生活を通じまして一貫して科研費に支えられてきたと申してよいかと思います。…振り返りますと科研費の整備・充実と一緒に道を歩み、研究者として育てていただいたとありがたく思っております。(出典:「学術月報」2006年10月号)

◆ 末松安晴・元東京工業大学学長、東京工業大学名誉教授

「レーザー光の導波伝送に関する基礎研究」
(1966～ 各個研究、特別推進研究 他)

⇒ 超高速・長距離光ファイバー通信の端緒を開拓
文化功労者(2003年)



科研費がなければ私の研究は存在しなかった。科研費との絆は、1)光通信研究の育ての親、2)日本の卓越技術の集成とネットワーク発信の構築、そして3)国の学術研究の推進など、誠に深い。…平成2年(1990)まで科研費の強力な支援を受けて光通信の基礎研究を進めた。
(出典:科研費NEWS2009年1月号)

◆ 山中伸弥・京都大学再生医科学研究所教授

「蛋白質翻訳調節因子NAT1の機能解明」
「細胞核初期化の分子基盤」
(1999～ 奨励研究(A)、特定領域研究、特別推進研究 他)

⇒ iPS細胞の開発
ノーベル生理学・医学賞(2012年)



奈良先端科学技術大学院大学助教時代の科研費による研究成果が基盤となった、世界で初めての人工多能性幹細胞(iPS細胞)の樹立に対し、ノーベル生理学・医学賞(2012年)が贈られた。

○ 社会にブレークスルーをもたらした科研費の研究成果の例



「角膜の培養・移植を革新的に容易にする技術の開発」

岡野 光夫 東京女子医科大学 教授

温度に応答して親水性と疎水性を大きく変化させる高分子は温度変化によって細胞を脱着することができ、細胞の表面はほとんど構造的に変化せず、機能を保持させることができることを発見した。

研究の成果

高分子材料表面に温度で親水性と疎水性を大きく変化させる機能を導入し、これを細胞の接着および脱着の抑制に応用するという新しい概念を見いだした。

細胞をシート状に培養、それを利用して疾患を治療する技術(細胞シート工学)を開発した。

細胞シートの特性

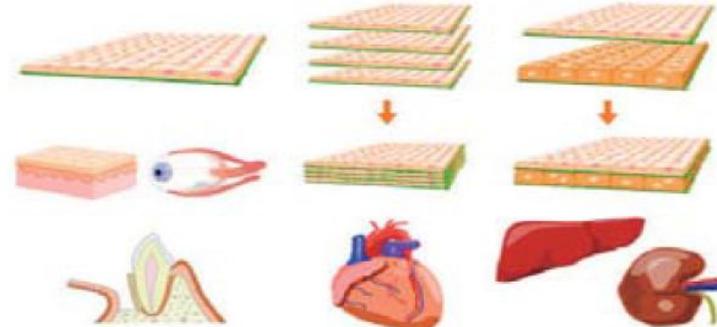
- ・体のどの部分の細胞からでも作製が可能。
- ・生体組織で速やかに生着する特徴を有する。
- ・複数の細胞シートは積み重ね、接着させることができる。

以上のような特性を利用し、培養した自身の細胞シートを傷ついたり、機能が低下した組織や臓器に貼り付けることで、拒絶反応なく機能を再生するといった従来の医療では不可能だった再生医療の可能性を大きく前進させた。

発展の基礎となった科研費の研究

「親水性・疎水性を可逆的に変化させる表面を用いた細胞培養」
(平成4年度～一般研究(B)) など

科研費では、1990年代から助成。



「細胞シート」を使った臓器再生も研究されている。

研究成果の展開

- ・細胞シートを利用した治療では、角膜上皮、重症心不全、食道で画期的な治療効果をあげており、現在臨床研究中、治験中のものが多数ある。
- ・肺、歯根膜、肝臓などの組織、臓器にも応用可能。

◆中村 栄一 大学院理学系研究科特例教授(化学)

「炭素クラスター複合体の精密有機合成化学」
(2001～ 特別推進研究)

小分子有機半導体のナノ組織化で
塗布型有機薄膜太陽電池を開発

紫綬褒章(2009), アメリカ化学会賞(2010)



上記特別推進研究はJST/ERATOプロジェクト(2004～2009)に引き継がれ、有機薄膜太陽電池の開発に繋がった。さらにJST/戦略的イノベーション創出推進プログラム(2009～2019)及び特別推進研究「有機半導体分子の合成とナノ組織化による高効率光電変換」(2010～2015)の支援を受けて、早期実用化に向けた研究を継続中である。

◆菅 裕明 大学院理学系研究科教授(化学)

「特殊ペプチド創薬を可能にする画期的なシステム」

(2009～ 特別推進研究)

RaPIDシステムの開発

産学官連携功労者表彰 日本学術会議会長賞(2011)
日本化学会学術賞(2012)

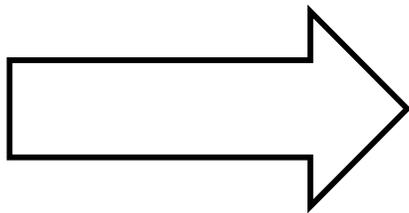


特殊アミノ酸を遺伝暗号リプログラミングにより組み込んだ特殊ペプチドを翻訳合成し、それをmRNAに融合してディスプレイすることで、活性特殊ペプチドの探索と発見が可能になった。この技術特許のライセンスを受けたペプチドリーム社は国内外の大手製薬企業と共同研究を開始し、2013年6月には東証マザーズ上場を果たし、時価増額1500億円の企業に成長している。

◆荒川 泰彦 生産技術研究所教授(量子ナノデバイス)

「量子細線レーザの試作に関する研究」

(1992～1993 試験研究(B) ほか)



半導体ナノ技術やナノデバイスの研究と実用化

江崎玲於奈賞(2004), 紫綬褒章(2009)



上記試験研究(B)は新世紀重点研究創生プラン(2002～2006)「光・電子デバイス技術の開発」、最先端研究開発支援プログラム(2009～2013)「フォトニクス・エレクトロニクス融合システム基盤技術開発」に引き継がれ、 -40°C から 100°C まで光出力が温度にほとんど依存しない量子ドットレーザ発振素子を実現し、ベンチャー企業設立にも寄与した。

生命の基本原理の解明から未来の医療までを支える科研費

科研費が支える基礎研究が疾患の分子機構の解明や新たな治療法の開発につながる。

◆水島 昇・東京大学医学系研究科教授

「オートファジーの分子機構と生理機能の研究」
(2003～ 特定領域研究、若手研究(S)、新学術領域研究 他)

➡ 哺乳類オートファジー研究の基盤構築
トムソン・ロイター引用栄誉賞(2013年)



科研費によって、酵母で得られた知見から研究を積み上げることができ、今ではオートファジーによる細胞内分解がヒトの正常機能維持に必要で、その破綻が疾患の原因になりうることもわかってきました。創薬の対象としても注目されています。

◆辻 省次・東京大学大学院医学系研究科教授

「ゲノム解析による脳疾患遺伝子の解明」
「ゲノム領域を基盤とした神経疾患の病因・病態機序の解明」
「パーソナルゲノム情報に基づく脳疾患の発症機構の解明」
(1988～未来開拓学術研究推進事業, 特定領域研究, 新学術領域研究 他)

➡ 脳疾患の発症機構の解明, 治療法開発
紫綬褒章(2011年)



科研費は、研究者の独創性の高い研究を育むことができ、脳疾患の発症機構をゲノム研究により解明するという、ゲノム解析、インフォマティクス、遺伝学、臨床神経学を包含します。学際的研究分野で、長期間にわたって地道な研究を積み上げる研究を支えて頂き、初めてこれらの成果を得ることができました。

◆門脇 孝・東京大学大学院医学系研究科教授・附属病院長

「罹患同胞対法・全ゲノムマッピングによる日本人糖尿病原因遺伝子の同定とその機能解析」
「アディポネクチンの2型糖尿病・高脂血症・動脈硬化症における病態生理学的意義の解明」
(1991～ 一般研究、基盤研究 他)

➡ 新規糖尿病治療薬・健康長寿薬創成への道筋を開拓
紫綬褒章(2010年)、日本学士院賞(2013年)



科研費は、先輩方から現役の研究者まで、一貫して日本の科学の歴史を支える存在であった。そして、今後の未来を担う次世代研究者へと繋がる頼もしい存在であって欲しいと切に願う。
また、一個人の研究人生においても、私も助手時代のただ純粋に真摯に科学に向かい合った小さなテーマから現在に至るまで、科研費と共に歩んできた。今後も科研費と共に自らの研究を更に発展させ、大いなる挑戦をしていきたい。

◆宮園浩平・東京大学大学院医学系研究科教授・研究科長

「TGF-βファミリーのがん微小環境に及ぼす作用とがん治療戦略」
(1996～ 一般研究、特定領域研究、新学術領域研究、他)

➡ がんに関わるシグナル分子とがんの浸潤・転移機構
紫綬褒章(2009年)、日本学士院賞(2011年)



多くの優れた発見は基礎的研究で得られる予せぬ結果が発端となって産まれてきます。私自身は科研費の支援に支えられ、基礎的な生化学・分子生物学研究から出発し、その成果を種々のがんとの関連で明らかにして来ました。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

北海道大学大学院工学研究院の長谷川靖哉教授は、発光性の金属錯体に関する研究などを行うため、平成15年度から継続的に科研費を取得。

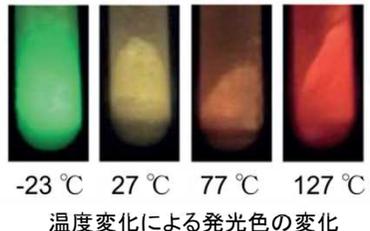
※若手研究(B)、新学術領域研究 (交付額 計約2,200万円)



研究成果の展開(その1)

研究成果をもとに、温度に応じて色が変わる特殊塗料「カメレオン発光体」を開発した。

この「カメレオン発光体」は、旅客機や宇宙船の模型に塗り、“感温センサー”として、超音速時の旅客機や宇宙船の表面温度の変化の検証に使用される。



-23 °C 27 °C 77 °C 127 °C 温度変化による発光色の変化

研究成果の展開(その2)

紫外線やブラックライトを吸収して光る新素材「ルミシス」(登録商標、販売元: セントラルテクノ株式会社)を開発。この新素材は、紫外線が当たると赤および緑に強く発色し、従来の素材では困難だったフルカラー画像化が可能となった。(従来の素材では、きれいな中間色を出すことが困難。)

この新素材を使用した商品として、トリックウォール(通常の照明では印刷された絵が見えないが、ブラックライトでは見える壁紙)やブラックライトで光るマニキュアやペンが販売されている。

また、非常に高度なセキュリティーシステムへの応用なども展開中である。



左: 通常照明、右: ブラックライト



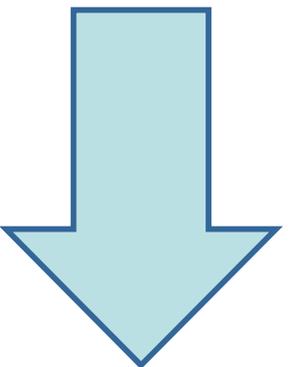
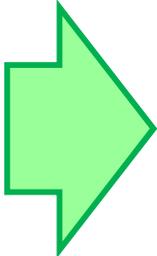
ブラックライトで光るマニキュア、ペン

(出典: セントラルテクノ株式会社Webサイト)

科研費の研究成果

レアメタルの1つであるユーロピウムの発光メカニズムを解明し、同じくレアメタルの1つであるテルビウムの強発光化合物の合成に成功した。

また、300度以上の耐熱性を有し、温度によって発光色が変わる新しい発光体を開発した。



その他の研究テーマ

21世紀情報社会では、情報をさらに高速かつ大容量に処理するための「光」を用いた通信技術が不可欠。この光情報通信を支える、光を正確に伝達する新しい機能材料として、光磁気機能を示す新物質の研究を進めている。

期待される経済効果・科研費の投資効果

この研究成果は、“感温センサー”として研究開発の場で活用されたり、トリックウォールとして商業施設・娯楽施設の壁や看板などディスプレイ産業、広告産業の場で使われたりしているほか、セキュリティーシステムなど多種多様な産業への展開が可能であり、その経済効果・投資効果は極めて大きいと期待できる。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

北海道大学水産科学研究院の**安井肇教授**は、コンブ類の水温変動と成長の関係に関する研究などを行うため、平成7～9年度に科研費を取得。
※基盤研究(C) (交付額 計約120万円)



当初、予想していなかった意外な成果・展開

研究成果を基に、海水温変動に伴うガゴメの発生・増殖・ライフサイクルの研究を更に進め、安定的に栽培・収穫できる条件を発見するとともに、有用成分のアルギン酸やフコイダン等を増大させる栽培技術を開発した。

当時、**高級昆布であるマコンブの成長を妨げると駆除対象とされていたガゴメコンブを、地元の特産品になるとして、地元函館の生産者リーダーに紹介し、栽培が行われた。**

その後、ガゴメコンブのネバネバが健康や美容に有効であることが認識され、**地域の企業と連携し様々な商品の開発とブランド化を図り、人材育成、雇用創出も含む“地域おこし”につなげた。**

期待される経済効果・科研費の投資効果

函館地域において、産学官の取組により開発された商品は、**ガゴメ関連商品を中心に200種類以上、累積売上げ66億円(平成15～23年度)**となっており、**平成25年度までの地域経済への効果は220億円と推計**されている。

また、民間企業により、「函館がごめ連合」が設立され、「函館がごめ昆布」の産業育成、製品化、情報発信を行っている。

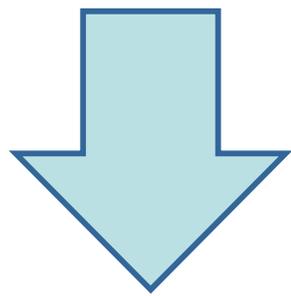
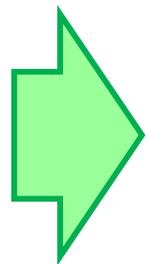
- 商品例: 昆布茶、せんべい、ラーメン、チョコレート、サプリメント、美容クリーム、美容石けん、シャンプー



○年間売上: 平成21年度約8億円、平成22年度約10億円、平成23年度約12億円

科研費の研究成果

温暖化や気候変動が海洋生物に及ぼす影響や、褐藻コンブ科のマコンブ、ガゴメ、スジメについて、水温変化がそれらの成長、形態形成に及ぼす影響を調べ、それら3種の成長と水温変動の関係を明らかにした。



今後の研究課題

海洋生物資源の保全と地域貢献に向けて、ガゴメに含まれる成分「アルギン酸」「フコイダン」の持つ**抗高血圧作用、抗がん作用、創傷治癒作用などの生理機能に着目し、医療分野への応用も視野に**、ガゴメの特長をさらに活かすためのガゴメのライフサイクルに関する研究を進める。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

岩手大学工学部の高木浩一教授は、放電プラズマや電気エネルギーに関する研究を専門としており、プラズマ生成と制御に関する研究などを行うため、平成5年度から継続的に科研費を取得
※奨励研究(A)、基盤研究(B)(C)、特定領域研究(交付額 計約3,400万円)



※古くから「雷の落ちた場所にはきのこが生える」という言い伝えがあり、古代ギリシャの哲学者プルタルコスの話集に記録があったり、「稲妻(いなづま)」の語源を「稲の夫(つま)」であるとする説がある。

当初、予想していなかった意外な成果・展開

高木教授開発の「小型の高電圧発生装置」に、**岩手県**内の森林組合やキノコ加工業者が関心を寄せ(※)、共同研究を開始。その結果、キノコの菌糸を植え付けた「ほだ木」に電気刺激を与えると、**シイタケで約2倍の収穫**となることを実証。

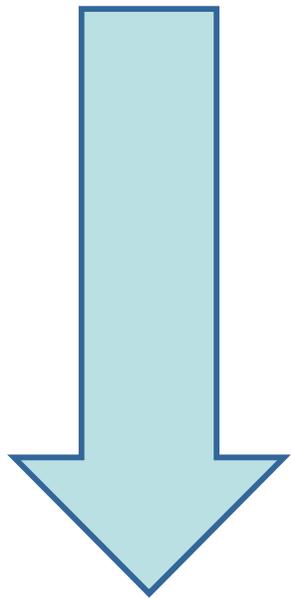
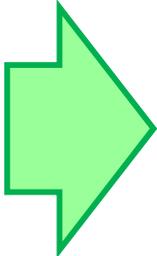


上:電圧印可なし、下:あり

静岡県**の友信工機(株)**、神奈川県**の(株)ミトミ技研**と「**小型の高出力パルス発生装置**」を開発・販売。

科研費の研究成果

プラズマによる汚水・排ガス処理に関する研究の実験手段として、**小型の高電圧発生装置を開発**



研究の最終目標

- ・放電プラズマによる有害大気汚染物質の処理
- ・水中パルスパワー放電による水環境の浄化
- ・パルス高電界を用いた農業・水産品サプライ力向上

今後の研究目標

- ・**農作物全体に応用できる技術の開発**
- ・水中放電による殺菌処理と野菜の成長促進
- ・非熱平衡プラズマを用いた青果物の腐敗菌の不活性化

他地域・企業への波及

高木教授の理論を参考に、**神奈川県(株)グリーンテクノ**が、**愛媛県産業振興課**と共同で「**きのこ増産装置**」を開発し、**約48万円で販売中**。

期待される経済効果・科研費の投資効果

仮に、シイタケの収穫が2倍になると、**岩手県で+47億円、全国で+608億円の経済効果が期待**。

科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、**岩手県で約140倍、全国で約1,800倍の投資効果**をもたらす。

○生シイタケの国内総生産額(H24年度):岩手県約47億円、全国約608億円
○高木教授への科研費交付額(H5年度~):約3,400万円

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

東北大学大学院工学研究科の**小菅一弘教授**は、人間と協調するロボットの研究を専門としており、人間の意図推定に関する研究などを行うため、平成12年度から継続的に科研費を取得。
 ※基盤研究(A)(B) (交付額 計約8,700万円)



※ダンスパートナーロボットの開発を通じて、ダンスカップルが協調してダンスを踊るための意図推定技術の研究を行い、男性ダンサーからロボットに加えられる力・モーメントなどのリード情報をモデル化することで、推定を行う手法を開発した。



科研費の研究成果

人と能力を補完しあうことにより、ロボットだけでは不可能な作業を可能にするため、**人とロボットとの機能補完型の知的協調制御技術**を確立した。

次に、社交ダンスロボットの研究・開発を基に、**ロボットが人間の意図を推定するメカニズム**を一般化し、人間とロボットの協調作業システムに適用した。

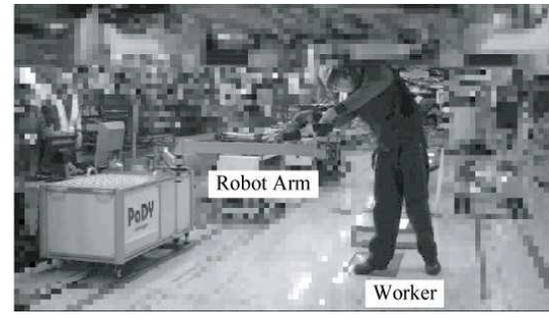
さらに、自動車の組み立てラインにおいて、**作業者の行動を予測することで、作業者に協調し、必要な時に必要な部品・工具を作業者に供給する手法**を開発した。



当初、予想していなかった意外な成果・展開

小菅教授が開発した「意図推定技術※」をベースとして、**自動車会社と共同研究**を開始。その結果、自動車の組み立てラインにおいて、ロボットが、作業者の意図を推定して部品と工具の配送を行うタイミングを図ることで無駄な歩行を減らし、作業効率が向上することを実証。

地元の自動車会社と「組立作業支援ロボット」を開発。



研究の最終目標

作業者と同一空間内で作業のサポートを行う「**作業支援パートナーロボット**」により、

- ・無駄な歩行の削減
- ・気遣い作業の排除
- ・作業効率の向上

を実現する。

また、それにより培った技術を基に、**日常生活の支援を行うロボットアシスタント**を実現する。



今後の研究目標

- 組立工程全体に応用できる技術の開発
- ・大物部品組立工程の作業支援
- ・安心安全技術

他業種への波及

製造業の組立作業以外にも、医療や物流など幅広い用途での応用が期待できる。

期待される経済効果・科研費の投資効果

仮に、最終的に**組立ラインでの生産効率が1.2倍になるとすると、約17%の業務効率化効果が期待され、全国の自動車工場に普及すれば年間約595億円の経済効果**がある(人件費750万円と仮定)。科研費の交付額は、この経済効果に照らすと**約684倍の投資効果**をもたらす。

○全国の自動車組立工4.6万人

(<http://globaljapancalls.com/index.php/data/243-automobile-assemblers>)

○小菅先生への関連研究の科研費交付額(H12年度～): 約8,700万円

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

東北大学大学院生命科学研究科の**渡辺正夫教授**は、植物のアブラナ科の「自家不和合性」の機構解明の研究などを行うため、平成11年度から継続的に科研費を取得。
※若手研究(S)、基盤研究(B)、特定領域研究
(交付額 計約2億8,700万円)



※「自家不和合性」とは、被子植物において自家受精(自分の花粉による受粉・受精)を防ぐ最も重要な手段であり、新しい遺伝子型を作成し、地球上に被子植物が広がった成功要因の一つと考えられている。

研究成果のアウトリーチ活動への展開

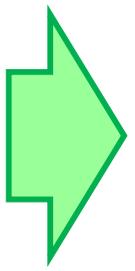
「自家不和合性※」に関する植物の生殖過程を解明した研究成果は、小中高生にとっても不思議で興味深い内容と思われる。
10年ほど前から、次世代の研究者の卵を孵化させることにもつながる**小中高校での出前講義を開始し、現在600回を超える。**



渡辺教授は、これまで講義を受けた児童・生徒たちから、**1万8千通を超える感想や質問などの手紙を受け取り、それら全ての児童・生徒に回答や励ましの手紙を送っている。**



出前講義を行った学校の教員からは、渡辺教授からの手紙をうれしそうに読んだり、自宅に飾っている児童・生徒の状況などが多数寄せられている。



科研費の研究成果

アブラナ科の植物における「**自家不和合性**」の機構を解明するとともに、自家受粉でも正常に受精し結実する「**自家和合性**」の植物であるシロイヌナズナについて、特定の遺伝子を操作することで、世界で初めて「**自家不和合性**」のシロイヌナズナを作成することに成功



世界的な一流科学誌であるNatureやScienceに掲載



今後の研究展開

植物の「自家和合性」と「自家不和合性」を、特定の遺伝子を操作することで制御する可能性を示すことができ、食用としてアジア、ヨーロッパでは重要な作物であるアブラナ科の主力作物**ナタネの増産に貢献**できる可能性がある。

アウトリーチ活動の成果

渡辺教授の取組は地元**仙台**の新聞に数多く取り上げられ、渡辺教授は、新聞紙面で連載をしたり、地元ラジオ番組に出演したりするなど、**基礎科学の成果が地域社会に大きく還元**されている。

また、これまで出前講義を受けた児童・生徒の中から、研究者や海外の大学進学などを目指して全国の有力大学に進学し、日々努力している者も多く、出前講義の波及効果を経済的価値に換算することは困難であるが、**我が国の未来を担う次世代の若者の教育にも多大な影響**を与えている。

こうした**渡辺教授の双方向の交流を通じた出前講義の活動に対し、平成25年度野依科学奨励賞(国立科学博物館実施)が授与**される。11

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

茨城大学農学部の新田洋司教授は、
水稲の品質や収穫に関する形態学的
研究を行うため、平成6年度から科研
費を取得。
※奨励研究(A)、基盤研究(C)
(交付額 計約450万円)

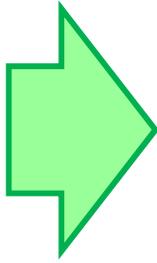


研究成果を活用した商品化への展開

- ①大手家電メーカーと共同で健康効果のあるおいしいお米を炊く炊飯器を共同開発した。
- ②食材メーカーと共同開発した高品質で味のいい保存用添加物は、業界用として広く利用されている。
- ③大手機械メーカーとレトルトパックのご飯を製造する装置を共同開発した。

科研費の研究成果

水稲の品質、味、収穫量等に影響を及ぼす根の分化・形成部位、デンプン等の貯蔵物質の蓄積の様相を、形態学的に明らかにするとともに、夏季の異常高温によって引き起こされる水稲の品質、味、収穫量の低下要因を明らかにし、その影響を低減する栽培制御技術を提示した。



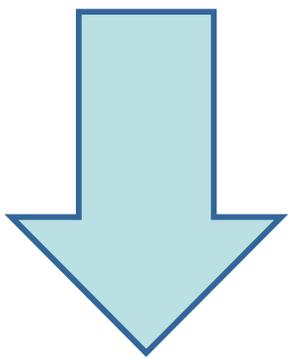
当初、予想していなかった意外な成果・展開

水稲と同じイネ科のスイートソルガムを原料にバイオエタノール燃料を生産する研究に、水稲の栽培制御技術や貯蔵物質の蓄積に関する研究成果を応用し、バイオ燃料・地域イノベーションの分野に展開している。



○スイートソルガムのメリット

- ・食用でないため食料と競合しない。
- ・成育に土壌を選ばないため耕作放棄地でも栽培可能。(耕作放棄地の拡大抑制・減少を期待できる。)
- ・栽培により、土壌中の窒素やリン酸を回収するので、土壌環境の修復が可能。(塩害の軽減、放射性セシウムの除染効果もある。)



今後の研究課題

- ・イネ科作物の登熟・多収穫
- ・高温・低温環境下におけるイネの登熟
- ・米の品質・食味
- ・安定多収で環境負荷を軽減した水稲栽培技術

期待される経済効果・科研費の投資効果

- スイートソルガムによるエタノール生産コスト: 最大49円/L
※他の作物による現在の生産コスト: 約100円~150円/L
- バイオエタノールの市場規模: 37万KL約500億円(2010年度)
※政府目標: 2020年にガソリンの3%(180万KL、2,400億円相当)
- エタノール製造装置の販売価格: 1,000万円~2,000万円

仮に、バイオエタノール市場の1割のシェアを得たとすると、2010年度の市場規模で約50億円の経済効果が期待。科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、約1,000倍の投資効果をもたらす。12

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

群馬大学理工学研究院の海野雅史

教授は、ケイ素と酸素を含む化合物(シリコン)の合成に関する研究などを行うため、平成8年度から継続的に科研費を取得。

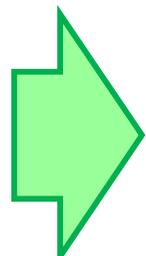
※奨励研究(A)、基盤研究(B)(C)、特定領域研究、挑戦的萌芽研究(交付額 計約3,400万円)



科研費の研究成果

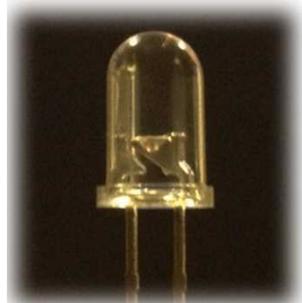
耐熱性、絶縁性に優れたケイ素と酸素を含む化合物(シリコン)の構造を、はしご型やかご形、3Dはしご型などに制御し、合成する方法を開拓。

これにより、従来ランダムな構造であったシリコンの構造を制御することにより、性能が上がり、他の既存の材料では耐熱性・耐久性が不十分な分野においても、材料として使用することが可能となった。



当初、予想していなかった意外な成果・展開

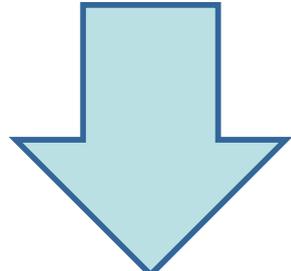
海野教授の研究による新素材は、LEDの高輝度化に伴う発熱に耐えうる透明材料として、自動車のヘッドライト、照明、スポットライトなどへの適用が期待できる。



LEDの写真:透明部分が封止材

また、電子材料メーカーと共同で、従来より耐熱性の高い電子部品の封止材を作ることができる化合物を開発し、パソコンや通信機器、一般家電製品内のミニパソコンなど、広く用いられている。

シリコンの材料としてアルコールの炭素原子をケイ素に変えたシラノールについては、シラノールを含む色素が太陽電池の効率と耐久性を大幅に上げることが分かったため、従来よりも低コストで製造できる太陽電池の市販化に向け、電子化学品メーカーと開発を進めている。



今後の研究目標

水素結合、イオン結合など様々な有機化合物の結合を利用し、高機能素材、光機能材料、ナノエレクトロニクス(分子素子)などをターゲットとして、ケイ素を中心に有機元素化学を発展させていく。

期待される経済効果・科研費の投資効果

海野教授の研究によって開発された新素材は、年間25%以上で市場が成長しているLEDや、一般家電製品にまで供給が広がっている電子部品の封止剤、また、今後、大幅に市場が拡大する太陽電池など、幅広い分野において、“材料”としての活用が期待されており、大きな経済効果を生んでいる。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

東京大学・お茶の水大学の藤巻正生名誉教授は、食品の機能に関する系統的研究を行うため、昭和59～61年度に科研費を取得。
※特定研究（交付額 計約6億円）

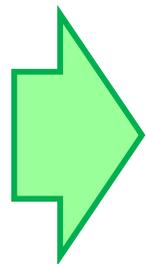


研究成果の意義

食の3次機能に着目した機能性食品科学の研究は、昭和50年代後半頃にその萌芽が認められるが、それらの研究を集積し、「**機能性食品(※)**」という**新しい概念を学術的に確立**。
医学、薬学などの関連分野や産業界を巻き込んだ新しい分野に発展した。
※生活習慣病などの疾病予防や老化防止などの機能を有する食品（例：茶カテキン、乳酸菌）

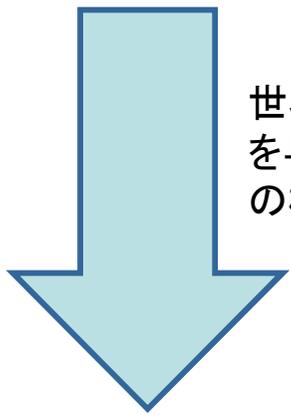
科研費の研究成果

食品の機能として従来から研究されてきた栄養機能（1次機能）、味や香りなどの嗜好性に関わる感覚機能（2次機能）に加え、**生体防御、疾病予防などの生体調節機能（3次機能）**が存在することを明らかにした。



研究成果による新分野の創出とその経済効果、科研費の投資効果

- 平成 3年：機能性食品の概念を具現化するものとして、「**特定保健用食品**」の制度が**成立**（世界初）。
- 平成 5年：最初の製品が認可。
- 平成16年：**食品の国際基準**を採択するコーデックス委員会において、**健康機能表示が定義**。



世界的にも大きなインパクトを与え、Nature誌でも日本発の概念として紹介される

◆市場規模

平成9年：1315億円 → 平成23年：5175億円



ヘルシア緑茶(花王株式会社)
「食後の血中中性脂肪が上昇しにくいまたは身体に脂肪がつきにくい」表示をした食品



キシリトール・ガム(株式会社ロッテ)
「歯の健康維持に役立つ」表示をした食品

その後の研究展開

その後、京都大学の千葉英雄教授(昭和63年度～平成2年度)、東京大学の荒井綜一教授(平成4～6年度)に引き継がれ、科研費の重点領域研究において研究が進展された。

科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、平成23年の時点で**約860倍の投資効果**をもたらしている。

また、**イギリス、スウェーデン、中国などに食品の健康機能の表示制度が広まるとともに、市場は世界に拡大している。** 14

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

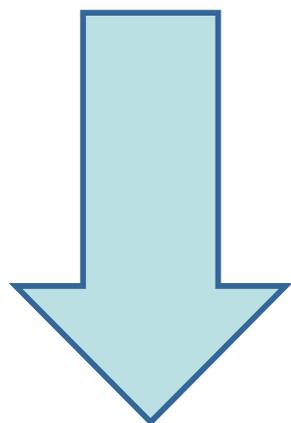
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科の田上順次教授と北迫勇一助教は、むし歯の診断法および予防法に関する研究などを行うため、平成18年度から科研費を取得。
※基盤研究(A)(C) (交付額 計約4,000万円)



北迫助教

科研費の研究成果

酸性・アルカリ性の度合いを表すpH値を指標としたむし歯の診断法・予防法の確立を目指し、**小型のpHセンサーを開発するとともに、むし歯表層のpH値の変化を測定・分析した。**



研究の最終目標

pH値を指標とした、新たなむし歯の診断法・予防法の臨床応用を進める。

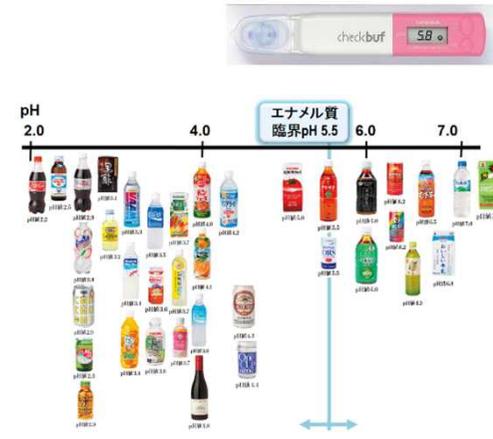
当初、予想していなかった意外な成果・展開

唾液のpH値を測定し、むし歯のリスク判定を行う、唾液検査キット(商品名「チェックバフ」)を堀場製作所株式会社(京都)と共同開発し、株式会社モリタ(東京)より販売。



この検査キットにより、**市販の飲食物のpH値を、簡便に測定できるようになったため、食生活習慣における酸蝕症(※)の危険性について、容易に判断できるようになった。**

※ 酸性の食べ物(レモンなど)や飲み物(炭酸飲料など)の酸が、むし歯菌を介さず、直接歯を溶かす症状。pH5.5以下の飲食物は、歯の表面をおおうエナメル質を溶かす。



期待される経済効果・科研費の投資効果

○唾液検査キット「チェックバフ」
売上:2,200台、売上額:約7,000万円

従来、むし歯のリスク判定を行う唾液検査キットには、リトマス試験紙の様に色の変化で判定する、主観的な診断が用いられてきたが、この検査キットにより、客観的な測定による診断が可能となり、適切なむし歯予防ならびに治療の実現につながることが期待される。

また、酸蝕症の危険性が容易に判断できるようになったことから、歯科医院や学校、保健所のほか、新聞・テレビ、雑誌における啓蒙活動が進み、酸性の飲食物が歯に及ぼす影響について、広く周知することができた。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科の**高村禪教授**は、液体電極プラズマの特性に関する研究などを行うため、平成13年度から継続的に科研費を取得。
 ※萌芽研究、基盤研究(B)
 (交付額 計約3,650万円)



当初、予想していなかった意外な成果・展開

高村教授の研究成果により、元素分析装置の**小型化の障壁となっていた大容量の電源やプラズマガスなどが不要となり、小型化・軽量化が可能**となった。



(出典:株式会社マイクロエミッションWebサイト)

これにより、大型分析装置を備えた研究室等では測定できなかった**40種類以上の元素が、その場で短時間・高感度に測定可能**となった。

大学発ベンチャーの株式会社マイクロエミッションにより市販化され、初期のハンディー器のほか、現在は、複数の企業と連携し、特定の単元素測定用の装置やより高感度な装置など**複数のラインナップの共同開発を進めている**。

期待される経済効果・科研費の投資効果

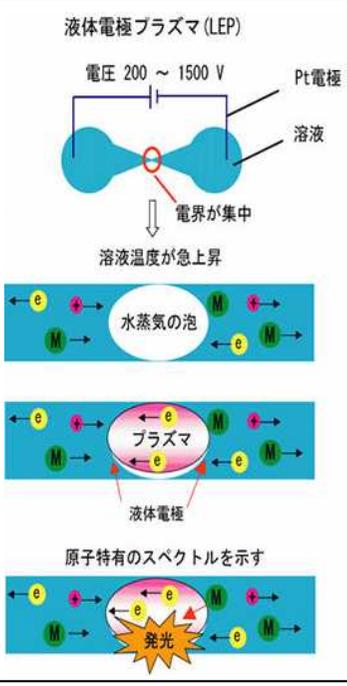
○ハンディー元素分析装置MH-5000関連商品
 平成24年度売上: 機器10台+消耗品 計約2,850万円

従来の分析装置は大型で高価なため、例えば工場においては抜き取り検査しかできなかったが、本装置は、小型で安価なため、工場のラインに1台ずつ設置し、連続自動計測をすることなどができる。このため、以下のような幅広い産業において、**活用が期待**されている。

Ex: 製造業(製造工程の工程管理、排水の定期的な監視)、環境測定(水質・土壌の検査)、産廃流通(有害金属・貴金属の含有確認)、食品流通(食品の安全検査)、医療(血液検査、尿検査)、健康産業(食品中のミネラル確認)¹⁶

科研費の研究成果

中央にくびれを持つ小型容器に液体を入れ、その両端に高電圧を加えてプラズマを発生させる**“液体電極プラズマ”**の特性を明らかにし、プラズマ発光した元素の波長から、**液体中の元素の種類と量を簡単・高感度に測定する“液体電極プラズマ法”**を確立した。



研究の最終目標

環境中の重金属汚染等のモニタリングのため、食物、井戸水、工場排水、廃棄物等に含まれている有害な金属を、現場で直接測定できるマイクロ元素分析器の開発を進めている。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

豊橋技術科学大学大学院工学研究科の中内茂樹教授は、人間の質感認知に対する環境や学習の影響に関する研究などを行うため、平成22年度から科研費を取得。

※新学術領域研究(研究領域提案型)
(交付額 計約4,600万円)



当初、予想していなかった意外な成果・展開

真珠の品質を決める光沢(てり)や干渉色(巻き)を光によって客観・定量的に計測することが可能となり、浜松市のディスク・テック株式会社により真珠品質計測装置として開発・販売されている。

通常2日間かかる約1万粒の真珠の選別が、品質レベルに応じて約4時間で自動選別可能となり、真珠鑑定士の人手不足への対応や、宝飾店での品質保証などに活用できる。

また、この装置は、三重県水産研究所において、真珠の母貝研究にも活用され、「スーパーアコヤガイ」の選別や育種にも利用されている。

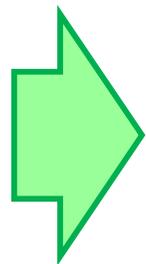


(出典: ディスク・テック株式会社Webサイト)

科研費の研究成果

ヒトの材質識別能力と質感特性(光沢感・冷暖感等)の関係性や、質感認知と画像特長(光沢感、輝度歪度、透明感、輝度コントラストなど)の関係性を解析した。

その課程で、具体的事例として真珠を対象に、真珠の品質評価における専門家と素人の知覚・判断特性の違いを明らかにするとともに、品質評価と相関の高い真珠像の特徴に着目し、真珠を破壊せずに真珠品質を計測する技術を確立した。



期待される経済効果・科研費の投資効果

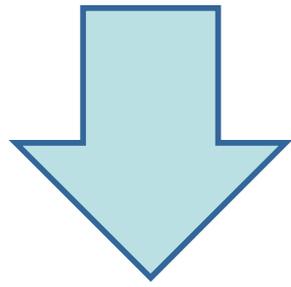
○真珠品質計測装置(単数計測タイプ): 約80万円
(複数計測タイプ): 約250万円

→現在、10台程度の販売実績がある。
(各タイプ5台ずつとすると、売上実績は約1,650万円)

中国や東南アジア産の真珠が増え、価格低下と品質劣化が問題となっている真珠業界からは、国産の真珠の品質の違いを数値化できる世界初の装置として、大きく期待されている。17

研究の最終目標

画像特徴から質感が生み出される視覚情報処理過程を明らかにするとともに、質感を見分ける技術、質感を操作する技術の開発へと結びつける



○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

名古屋大学工学研究科の堀勝教授は、プラズマをつかったモノづくり・エネルギー産生（産業利用）、環境浄化・医療応用（社会利用）を実現するため、計測・プロセス、装置、デバイスの基盤技術創成の研究などを行うため、平成6年度から継続的に科研費を取得。

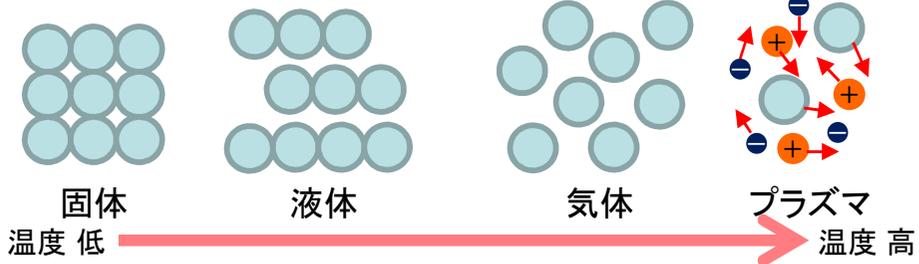


※奨励研究(A)、挑戦的萌芽研究、基盤研究(A)(B)、新学術領域研究、特定領域研究等（交付額 計約3億8,000万円）

科研費の研究成果

プラズマ(※)の構造や生成・制御の仕組みを解明し、プラズマを用いたコーティング（材料の表面に薄膜を堆積する）技術やエッチング（材料の表面を削って微細加工をする）技術の高度化を行った。

※固体、液体、気体に次ぐ物質の第4の状態のこと。



プラズマは、イオンや電子という極めて小さな粒子が働くため、ナノメートル単位の穴や溝を掘ったり、膜を付けるのに適しており、微細加工・薄膜合成・表面改質・殺菌・除菌・消毒・除害・光源など様々な場面で活用できる。

研究の最終目標

プラズマによるモノづくりや医療応用に向けて、プラズマの材料や生体に及ぼす作用を学理の基に解明し、全く想像できなかった新しい装置・プロセス・デバイスの創成を目指す。

研究成果の展開

堀教授の研究成果を活用し、従来は真空状態の中でしか使用できなかったプラズマを、一般の工場内でも使用できるようにした、小型で安価の大気圧プラズマ発生装置が開発されるとともに、技術の高度化が進められた。

これらの装置や技術は、例えば、液晶ディスプレイに使用するガラス基板やコンタクトレンズ、電子部品、医療機器の表面処理などのクリーニング技術に係るコストを低下させる一方で、高精度化を実現し、中小企業等にも広く利用されている。

また、超高電子密度の大気圧プラズマ装置を開発し、プラズマ照射によるがん治療など医療への実用化を進めている。（プラズマを用いた治療法は、従来の放射線治療等で起きる副作用がなく、これまで治療が困難だった病気への活用も期待されている。）

期待される経済効果・科研費の投資効果

堀教授の研究成果を事業化するため、大学発ベンチャー企業3社（NUシステム株式会社、NUエコ・エンジニアリング株式会社、株式会社エヌ工房）が愛知県内に設立された。

また、大気圧プラズマ装置を共同で開発した名古屋の株式会社富士機械製造は、それまでプラズマ技術を使用していなかったが、現在では、気圧プラズマ装置製造・販売に関わる有数の企業に成長している。

これらを契機に、プラズマ技術産業応用センターが名古屋市に設立され、中小企業を中心とした産業界への技術シーズの移転と情報提供の場（約350社750名が会員登録）となるなど、愛知・名古屋地域の産業界の活性化に大きく貢献している。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科の**高山誠司教授**は、アブラナ科とナス科の「自家不和合性」の機構解明の研究などを行うため、平成11年度から継続的に科研費を取得。
※基盤研究(A)(B) (交付額 計約8,000万円)



※「自家不和合性」とは、被子植物において自家受精(自分の花粉による受粉・受精)を防ぐ最も重要な手段であり、新しい遺伝子型を作成することで多様性を獲得し、地球上に被子植物が広がった成功要因の一つと考えられている。

当初、予定していなかった展開

科研費の研究成果

アブラナ科とナス科の植物における「自家不和合性」の分子機構を解明するとともに、メンデルの優性の法則(片方の親の性質のみが子どもに伝わる現象)について解析し、両親の遺伝子の片側だけが不活性化される新しい仕組みを発見した。



自家不和合性研究で得た知識を利用し、**奈良の大和の伝統野菜の「大和まな」**について、**奈良県およびナント種苗(橿原市)**と共同研究を行い、日持ちがよく、形がそろい、**抗炎症機能の成分を多く含んだ新F1ハイブリッド品種「夏なら菜」と「冬なら菜」**を短期間で開発した。(従来の大和まなは、個体によって、成長速度や形、抗炎症機能成分の含有量がバラバラで、日持ちが悪かった。)「夏なら菜」は春から夏栽培に向く品種、「冬なら菜」は秋から冬栽培に向く品種であり、この2品種の組合せにより周年生産が可能になった。



今後の研究目標



様々な植物が、独自の自家不和合性機構を進化させ、変動する環境を生き抜いている実態が明らかになった。この自家不和合性の仕組みは、植物の免疫機構などから進化したと考えられ、本研究は、自己・非自己の識別という基本的仕組みの解明のみならず、植物が持つ様々な重要な仕組みの解明につながると期待される。また、得られた知見は、**植物の遺伝資源の保持などの環境保全面や、生産性の高い作物・病気に強い作物の育種など農業への応用面にも役立つ**ことが期待できる。

期待される経済効果・科研費の投資効果

○奈良県内の大和まなの生産量:約60トン(平成20年度)
*卸値価格換算:約1,400万円

従来の大和まなは、日持ちが悪く、流通に適していなかったため、主に奈良県近郊でしか消費されていなかったが、新品種により、生産量の増加と安定供給による販路拡大が期待できる。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

京都大学大学院地球環境学堂の**勝見武教授**は、廃棄物を再資源化して再利用する研究などを行うため、平成6年度から継続的に科研費を取得。

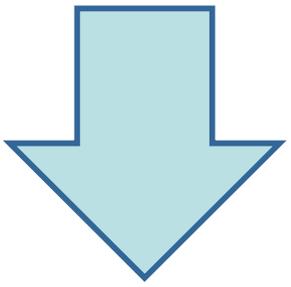
※奨励研究(A)、若手研究(B)、基盤研究(B)、挑戦的萌芽研究 (交付額計約3,800万円)



科研費の研究成果

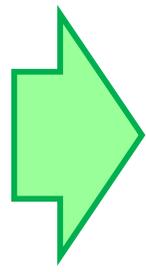
各種廃棄物の有効利用の方法、改良技術、特性をまとめるとともに、**廃棄物混じりの土砂や津波堆積物の物理化学特性を明らかにし、これらを再生資源として復興事業において利活用する方策を提案した。**

〔※災害廃棄物や津波堆積物には、木片等の混入が多く、特性が不明であったため、利用が敬遠される傾向にあった。〕



研究の最終目標

産業活動から発生する廃棄物由来の資源を社会基盤整備に利用した場合の環境安全性の評価、環境負荷の小さい基礎構造物の建設・維持管理技術の提案などを通して、**循環型社会の確立に貢献する。**



当初、予想していなかった意外な成果・展開

勝見教授の研究成果は、分別土砂の盛土材料や埋立て材等としての品質評価指針及び活用方針を示す**岩手県の「復興資材活用マニュアル(平成24年6月策定、平成25年2月改訂)」**に大きく反映された。



(参考: マニュアルより抜粋)

期待される経済効果・科研費の投資効果

岩手県、宮城県、福島県の3県で合計**約1,000万トン**(平成25年12月末現在の推計量)の**災害廃棄物由来の再生資材を復興事業で活用することに貢献し、地域の復興に大きく寄与している。**

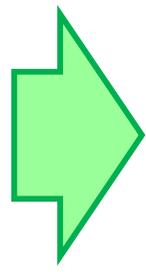
○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

京都大学学術情報メディアセンターの河原達也教授は、話し言葉の音声認識に関する研究などを行うため、平成5年度から継続的に科研費を取得。
※奨励研究(A)、基盤研究(A)(B)
(交付額 計約6,000万円)



研究成果の展開

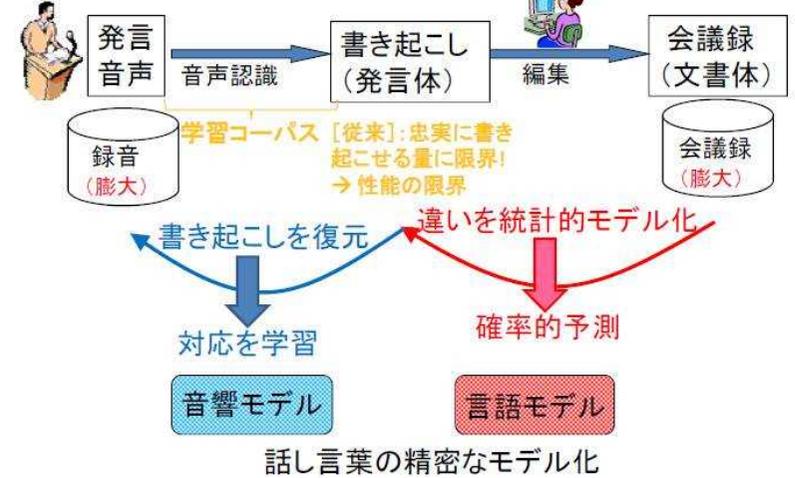
衆議院の会議録作成システムに、河原教授の音声認識技術が導入され、本会議・委員会の審議において、発言者のマイクから収録される音声自動的に書き起こされ、会議録の草稿が生成されている。認識の精度は約90%で、「えー」や「あの一」といった意味のない言葉の削除などにも対応している。
最終的な会議録の作成には、速記者が、10%程度の認識誤りの修正や「～ですが」「～ですね」などの冗長な文末表現の削除、口語表現の修正等を行っているが、このシステムにより、速記者の大幅な負担軽減となっている。



科研費の研究成果

会議や講演における話し言葉の音声・書き起こし・会議録を大規模に収録したデータベースから話し言葉のモデル化を行い、自動音声認識技術を確立した。

(参考: 音声認識技術の概要図)



期待される研究成果の社会への還元

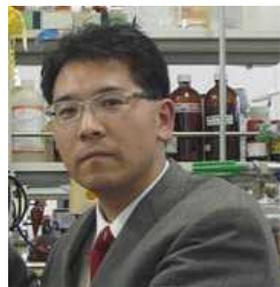
衆参両議院とも優秀な速記者確保が難しい中で、速記技術に頼らない会議録作成に貢献している。
また、衆議院での実績をもとに、ソフト開発を希望する企業への技術供与などを進め、音声認識システムの普及を図っている。
このシステムは、聴覚障がい者や外国人のために、様々な音声メディアに対して字幕を付与するサービスへの活用など、社会貢献が期待される技術である。

今後の研究課題

更なる精度の向上と、一般講演会や学校の講義・授業などへの展開を目指す。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

神戸学院大学栄養学部の**水品善之准教授**は、食品成分や栄養素の新しい健康機能性(抗がん作用・抗炎症作用など)を探索する研究などを行うため、平成19年度から継続的に科研費を取得。



※若手研究(A)、基盤研究(C) (交付額 計約2,400万円)

研究成果を活用した商品化への展開

神戸市の(株)だいちデイズと、ストレス抑制アミノ酸のGABAやうまみ成分のグルタミン酸が、通常の水煮大豆よりも約6倍含まれる「**やわらかスーパー発芽大豆**」を**共同開発し、販売**。

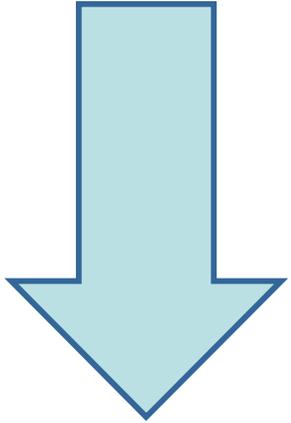
この蒸し大豆には、抗がん作用が期待されるゲニステインなどのイソフラボンが多く含まれることも実証され、**新しい健康機能性食品の商品化に成功した**。



(出典:株式会社だいちWebサイト)

科研費の研究成果

ホウレンソウ由来の糖脂質から抗腫瘍活性を見出したほか、**大豆中に抗炎症作用の活性成分を同定**し、これらが「**蒸し発芽大豆**」に**多く含有**することを発見した。



今後の研究課題

栄養素や食品成分から、副作用のない“体にいい成分”を抽出し、その科学的根拠を明らかにするとともに、機能性食品や化粧品、治療薬など、人の健康や美容に寄与する製品の開発を目指す。

期待される経済効果・科研費の投資効果

地元企業において、商品販売による経済効果があったほか、本商品を摂取することで、**国民の健康寿命の延伸も期待**できる。

- やわらかスーパー発芽大豆(標準小売価格:100グラム 210円)
累積売上数(2012年11月~):**20.2万袋**
累積売上額(2012年11月~):3,700万円
- 水品先生への科研費交付額(H19年度~):2,400万円

科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、現時点で**約1.5倍の投資効果**をもたらしている。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

岡山大学大学院自然科学研究科の則次俊郎教授(当時)は、高齢者や身体障害者の日常生活やリハビリテーションを支援する身体装着型のパワーアシストロボットに関する研究を行うため、平成16年度から継続的に科研費を取得。



※基盤研究(B)、特定領域研究
(交付額 計約8,800万円)

科研費の研究成果

ゴム素材を用いた伸張、収縮、歪曲動作が行える軽くて柔軟な、空気圧駆動の人工筋を開発した。



立ち上がり動作支援装置

これを用いて、人の身体の各部位(手足や腰)に衣服のように装着し、その衰えた筋力を補助することにより、必要な動作を支援する装置「パワーアシストウェア」を開発した。



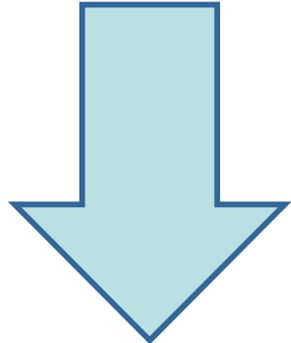
研究成果の商品化への展開

手や指が麻痺した高齢者や身体障害者の手に装着し、ペンで字を書いたり、ペットボトルを持ったりすることを可能にする「パワーアシストグローブ」を、岡山市のダイヤ工業株式会社と共同開発・販売。



(出典:ダイヤ工業株式会社Webサイト)

このグローブは、岡山市(在宅介護支援特区)が要支援・要介護認定者に貸与する介護機器の1つとしても認定されている。また、リハビリ用品としても注目されており、ヨーロッパなど海外の医療機器商社も高い関心を示している。



則次元教授は、「おかやまロボット研究会」を主宰し、岡山におけるロボットテクノロジーを推進するとともに、岡山発の新しい製品を生み出すため、地元企業との連携に力を入れている。

今後の研究課題

「パワーアシストウェア」の身体各部位の支援への展開と各装置の精度向上。

期待される経済効果・科研費の投資効果

地元企業において商品販売による経済効果があったほか、海外展開や他の部位(足や腰)に対する支援装置の商品化により、更なる経済効果が期待される。

○パワーアシストグローブ
価格:26万2,500円(リース:月額17,000円)
販売実績(平成24年~):約170万円



(出典:ダイヤ工業株式会社Webサイト)

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

広島大学医歯薬保健学研究院の**二川浩樹教授**は、義歯などに使う歯科材料の抗菌に関する研究などを行うため、平成9年度から科研費を取得。

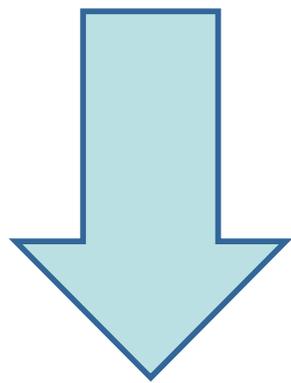


※奨励研究(A)、基盤研究(B)
(交付額 計約1,600万円)

科研費の研究成果

義歯表面のバイオフィルム(※)形成には、菌同士の相互作用、材料の組成・性質、微生物と生体の相互作用が関わっていることを明らかにし、バイオフィルムの形成を抑制する材料や仕組みの解明を進めた。

※物質の表面に付着した複数の微生物により形成される菌膜。虫歯や歯周病は、このバイオフィルム内の細菌によって引き起こされる感染症である。



研究の最終目標

歯や入れ歯やインプラントへの抗菌剤の固定化による虫歯・歯周病の予防

当初、予想していなかった意外な成果・展開

虫歯菌や歯周病菌等の発育を阻止する乳酸菌「L8020菌」を発見し、愛媛県の四国乳業株式会社と「L8020ヨーグルト」を開発・販売している。



(出典: 四国乳業株式会社HP)

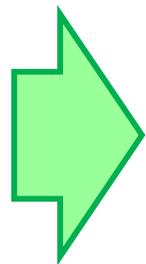
また、広島県のマナック株式会社と共同開発した固定化抗菌剤「Etak」は、インフルエンザウイルス等に効果のある消毒成分を長期間、布や人間の手につなぎとめられる新製品として、大きな反響を呼び、業務用の消毒剤のほか、白衣、寝具、タオル、マスク用の防菌スプレーなど、約50の商品に使われている。



(出典: エーザイ株式会社HP)

<主な商品例>

- ・大阪市の倉敷紡績株式会社による抗ウイルス生地の白衣
- ・エーザイ株式会社による「マスク防菌24」スプレー



期待される経済効果・科研費の投資効果

従来は、机や床などを消毒してもその効果は一時的で、消毒後に飛んできたウイルスは、消毒した表面で生きており、空気感染や接触感染の原因となっていたが、二川教授の研究成果を活用し、**学校、病院、ホテルなど公共施設で使用されるリネン類、床材、机や、公共交通機関の座席などへ抗菌加工を行うことによって、インフルエンザ等の感染拡大の防止につながると期待されている。**

- L8020ヨーグルト(飲むタイプ含む): 120円 × 年間約20万個
- クリスタルベールマスク: 約1,300円 × 年間約120万本

関連商品の市場規模は年間約16億円規模となっており、今後も更なる拡大が期待できる。科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、年間で**約100倍の投資効果**をもたらしている。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部の**青江順一教授**は、情報工学分野において、検索技法の高度化や感性情報の処理などに関する研究を行うため、平成4年度から継続的に科研費を取得。

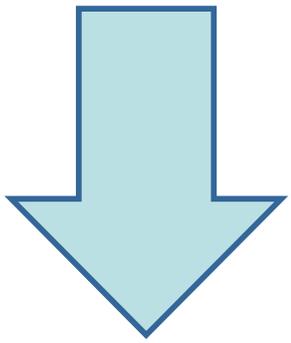


※一般研究(C)、基盤研究(A)(B)
(交付額 計約7,000万円)

科研費の研究成果

コンピューターによる情報処理の基礎となる検索技法において、高速でコンパクトな「ダブル配列法」を確立するとともに、その性能の向上と大規模言語知識の高速検索手法を実現させた。

また、感情を表現する語彙とそれらを使った構文から感情情報を収集・分析し、**文章から感情を解析する感性理解の技術基盤を構築**するとともに、**Web上の有害な情報(違法、誹謗中傷等)を検出する手法の確立**を進めている。



研究の最終目標

感情を理解し、会話の出来る人工知能の確立。

研究成果を活用した商品化への展開

徳島県のジャストシステムにおける漢字かな変換ソフトウェア「**ATOK**」の**初期開発に携わり**、研究成果を反映。

平成14年に、**大学発ベンチャー「(株)言語理解研究所」を設立**し、以下のような優れた言語理解機能を持つ製品や技術を提供している。

- ① **テキストマイニング**(大量の文章情報を機械的に分析)処理において、**文章から感性(満足、快い不満、不快などの心の表出)も読み取るシステムを開発**。(従来は文章中に出現する単語をカウントするだけだった。
(NTTデータ、日本アイ・ビー・エム等が導入)
- ② 携帯メールの文章を分析し、**文章に含まれる感情や緊急度を読み取り、それに適した画像(絵文字、顔文字等)を自動的に表示する機能を開発**。(NECが導入)
- ③ 言語で表現される心情や意図情報を(出典: 言語理解研究所Webサイト)体系化し、様々な製品にカスタマイズ導入できる**汎用的な人工頭脳エンジンを開発**。



アバターの表情に反映

期待される経済効果・科研費の投資効果

(株)言語理解研究所の売上高は、**年2億5,000万円前後で推移**しており、**平成14年からの約10年間で約25億円を売り上げ**ている。
科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、現時点で**約36倍の投資効果**をもたらしている。

○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

九州大学応用力学研究所の竹村俊彦准教授は、大気中の浮遊微粒子(エアロゾル)の気候変動に対する影響に関する研究などを行うため、平成15年度から継続的に科研費を取得。
※若手研究(A)(B) (交付額 計約3,200万円)



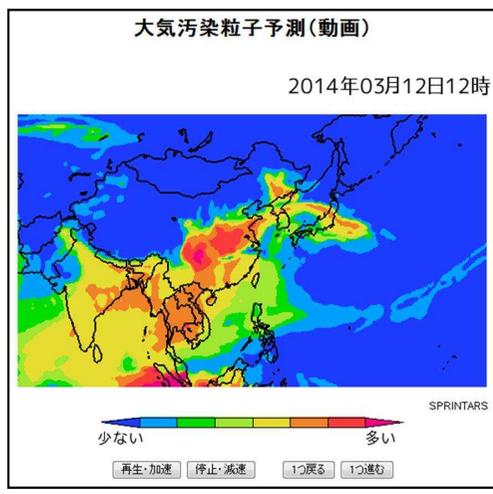
科研費の研究成果

大気中の浮遊微粒子(エアロゾル)(※)の地球規模での3次元分布をシミュレートするために開発された数値モデルSPRINTARSを用いて、**エアロゾルの直接・間接的効果による地表気温、雲水量、降水量等への影響を分析するとともに、エアロゾルの分布予測システムを構築した。**

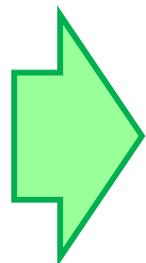
※具体的には、黄砂等の砂漠の砂、海の波しぶきでできる海塩粒子、石油・石炭の燃焼から発生する硫酸塩などがある。エアロゾルが太陽光や赤外放射を散乱・吸収したり、雲の核となって雲の性質を変えたりするなど、直接・間接的に地球大気に影響を及ぼし、気候変動の要因となっている。

当初、予想していなかった意外な成果・展開

研究成果であるエアロゾルの分布予測システムにより、**平成19年から週間予測情報をインターネット上で一般に公開している。**
特に平成25年以降、PM2.5の日本の越境飛来への社会的関心の高まりに応じて、強い注目を集めている。



(出典:SPRINTARSホームページ)



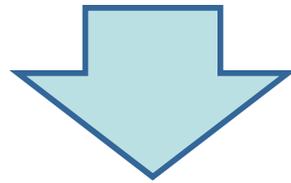
期待される研究成果の社会への還元

インターネット上で公開しているエアロゾル分布予測の情報は、**テレビ・ラジオ・新聞での天気予報やWebサイト、スマートフォンアプリなどの様々な媒体に転載され、広く活用されるとともに、健康影響への対策など様々な対策コストを最低限に抑えることにも貢献している。**

- 週間予測情報のホームページへのアクセス数
 - 平成19～22年:数10程度／1日
 - 平成23～24年:300前後(多くて1,000程度)／1日
 - 平成25年～ :10,000程度(多くて150,000程度)／1日**
- 転載により数百万人規模の潜在的なユーザがいると推測される。

今後の研究展開

エアロゾルの分布と気候に対する影響を定量的に数10年～数100年規模で予測するモデルを構築し、地球温暖化等の気候変動に関する研究を進める。



○日常生活や地域社会・経済に影響をもたらした科研費の研究成果の例

佐賀大学農学研究科の**野瀬昭博**教授は、夜に二酸化炭素を吸収し、昼に還元するCAM型光合成の制御機構の研究などを行うため、平成5年度から継続的に科研費を取得。
※基盤研究(B)(C) (交付額 計約1,900万円)

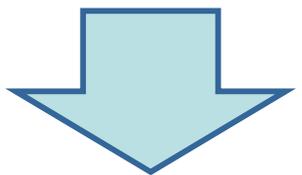


科研費の研究成果

地球温暖化に伴い拡大する乾燥地における植物の生産性改善を図るため、**パインアップル、アイスプラント**等のCAM植物が行う光合成(※)のメカニズムの一端(アイスプラントの持つ塩吸収・蓄積特性など)を解明した。



※通常の植物は、昼に気孔を開いて二酸化炭素を吸収するが、「CAM植物」は、夜に気孔を開いて二酸化炭素を吸収して葉の中に蓄え、昼に気孔を閉じて蒸散を防ぎ、二酸化炭素を太陽のエネルギーによって糖に変える「CAM型光合成」を行う。

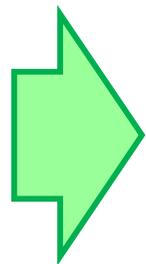


研究の最終目標

高温・乾燥の発展途上国における農業の発展と生活水準の向上に貢献するため、特に、**CAM型植物の光合成メカニズムの解明を通じて、これらの植物の品種改良や生産性向上を目指す。**

当初、予想していなかった意外な成果・展開

南アフリカ原産の植物「アイスプラント」が、**野菜としても利用できることを検証し、塩味のする新しい野菜「バラフ」として、大学発ベンチャー企業(株)農研堂が、佐賀県内の農家に栽培を委託し、販売。**ドレッシングが必要なく、健康に良い成分を多く含むため、注目されている。
(株)農研堂は、乾燥バラフを練り込んだ麺や美容石けん、保湿ジェルなど、**佐賀県の企業等と商品開発**を行い、応用商品の開発・販売を進めている。



社会への波及

類似の野菜を他の種苗会社が新たに開発し、**新種の野菜として1つのジャンルを形成し、広く認知されるようになった。**
また、新たな農業として注目されている**植物工場(人工光源、空調設備、養液培養による生産を行う)の主要作物として利用**されている。

期待される経済効果・科研費の投資効果

- バラフ: 1パック70グラム入り300円~500円
- 年間出荷量: 平成23年度約26万パック
- バラフ売上高: 平成23年度約4,000万円
(平成20~24年度約**2億5,000万円**)

科研費の交付額は、この経済効果に照らすと、**約13倍の投資効果**をもたらしている。
また、**応用商品や他のアイスプラント商品の販売による経済効果も考慮すると、新しい市場の創出に貢献した**と言える。 27